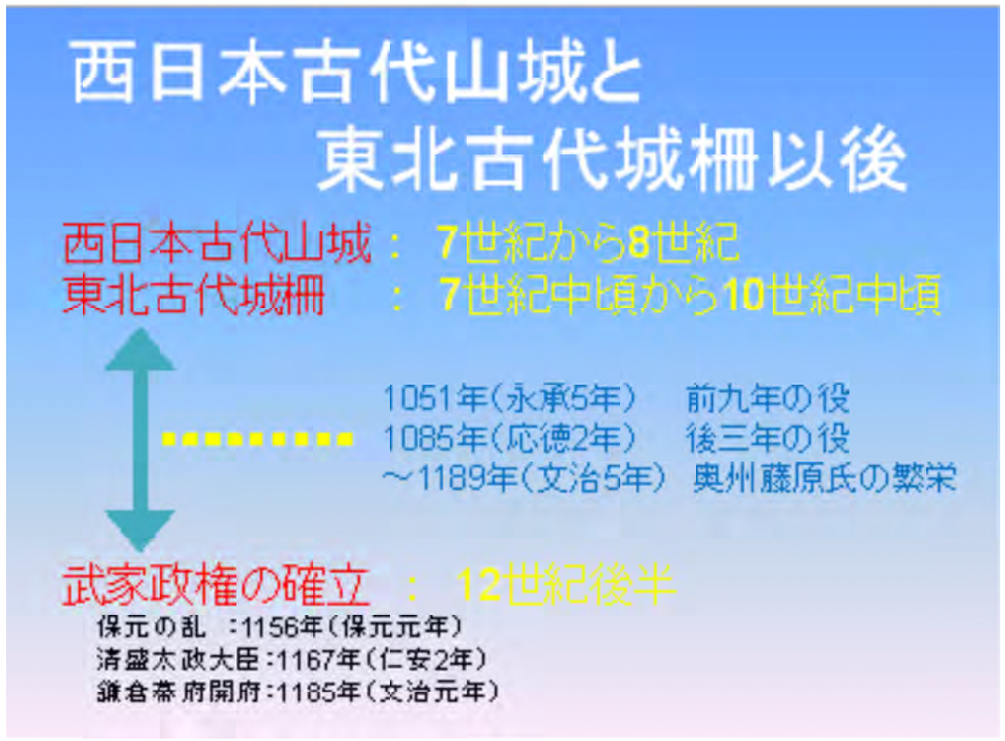
後三年合戦沼柵公開講座―沼館城跡と小野寺氏―

十一・十一世紀の城館

二〇二三年八月二〇日　齋藤　慎一

はじめに

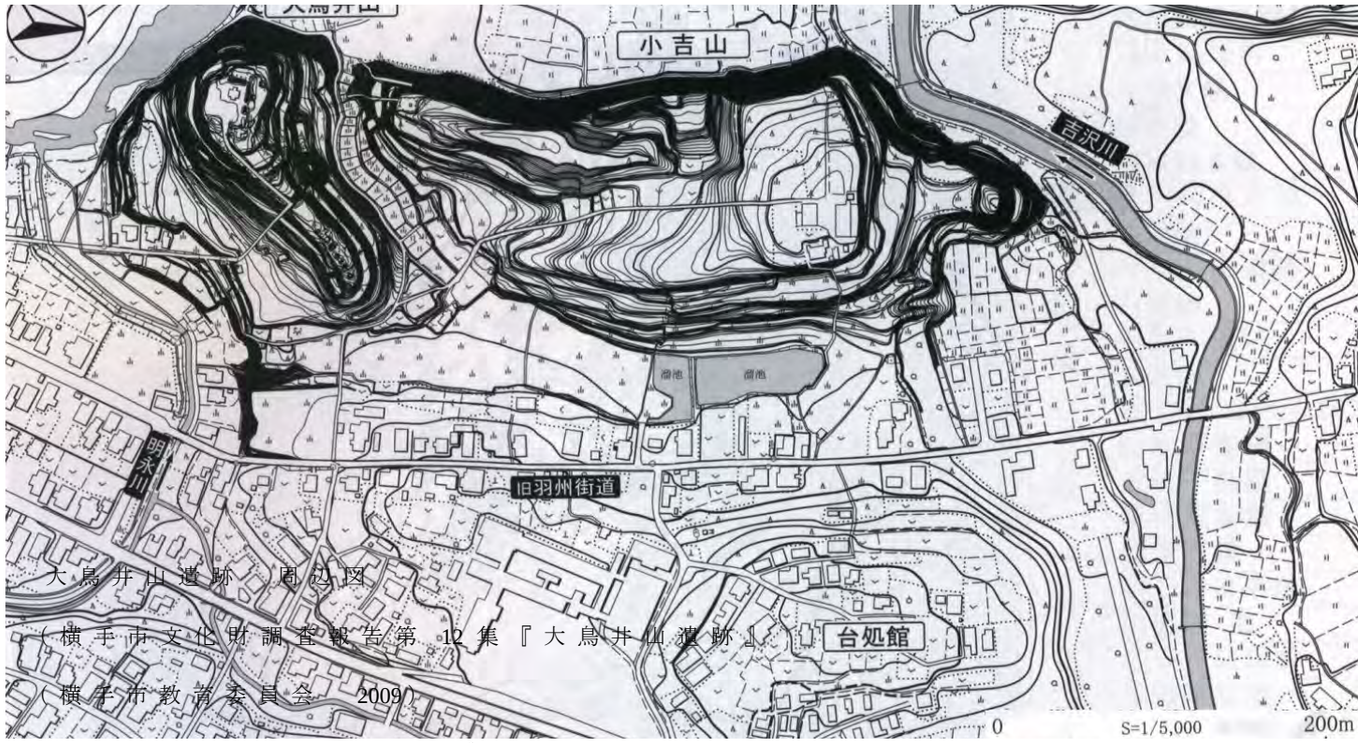
○東北地方北部の
○平安時代末期の城館
○古代と中世をつなげる視点を有する地域。
○近年の研究動向を踏まえて。



一　北日本の城館

大鳥井山遺跡

秋田県横手市
○11世紀を中心に営まれた居館跡
○旧羽州街道が南北に走る。
○前九年合戦や後三年合戦で知られる清原氏の勢力範囲
○大鳥井山と小吉山周辺が清原氏当主の清原光頼とその子頼遠の根拠地と比定
○二重の土塁・堀と柵列:堀幅　外側9.2ｍ　内側3.8ｍ
○大溝の北側地区では17棟、南側地区では43棟の掘立柱建物
○建物群は大きく分けて10世紀後半、11世紀前葉から中葉、11世紀後様の三時期の変遷
○出土遺物は、多数のロクロ土師器
○10世紀後半から11世紀末
○前九年合戦や後三年合戦と同時期の遺跡
○遺存状態の良好な土塁と堀が二重に周囲を巡る
○梁行２間、桁行５間の大型四面廂付掘立柱建物
○11世紀前半のロクロ土師器
○岩手県柳之御所遺跡や、福島県陣が峯城跡など12世紀に奥州に築かれた居館と類似
○東北地方の古代末から中世への移行期における地方豪



大鳥井山遺跡　周辺図
（横手市文化財調査報告第12集『大鳥井山遺跡』横手市教育委員会　2009）

族の居館の構造、建物配置、遺構の変遷などの内容が具体的に把握され、前九年合戦・後三年合戦の内容を記した文献に現れる清原氏に関連する遺跡の内容を具体的に知ることのできる希有な例

○土塁の規模は外側が最大幅9.2ｍ、高さ1.6ｍ、内側が最大幅3.8ｍ、高さ0.6ｍで、堀の規模は外側が最大幅8.8ｍ、深さ2.5ｍ、内側が最大幅3.7ｍ、深さ1.2ｍである。また土塁・堀の内側平坦面は最大幅４ｍの大溝により南北に区画される。

〈ポイント〉

●清原氏一族大鳥井氏の本拠地と推定。

●年代：10世紀後半から11世紀末　Ⅲ期に変遷。

＊始まりが払田柵の終末に重なる。

●地形に制約された弧を描く堀の存在

鳥海柵

岩手県胆沢郡金ケ崎町

○安倍氏の本拠地と目される。

○立地：胆沢城から北西にわずか２Kmの位置。

○年代：11世紀第２四半期から第３四半期

○方形を基調とする遺跡・・陸奥官衙の系譜？

○堀幅：8.15ｍ（伝二の丸東南部調査区　東部T）

○立地：胆沢城から北西にわずか２Kmの位置。

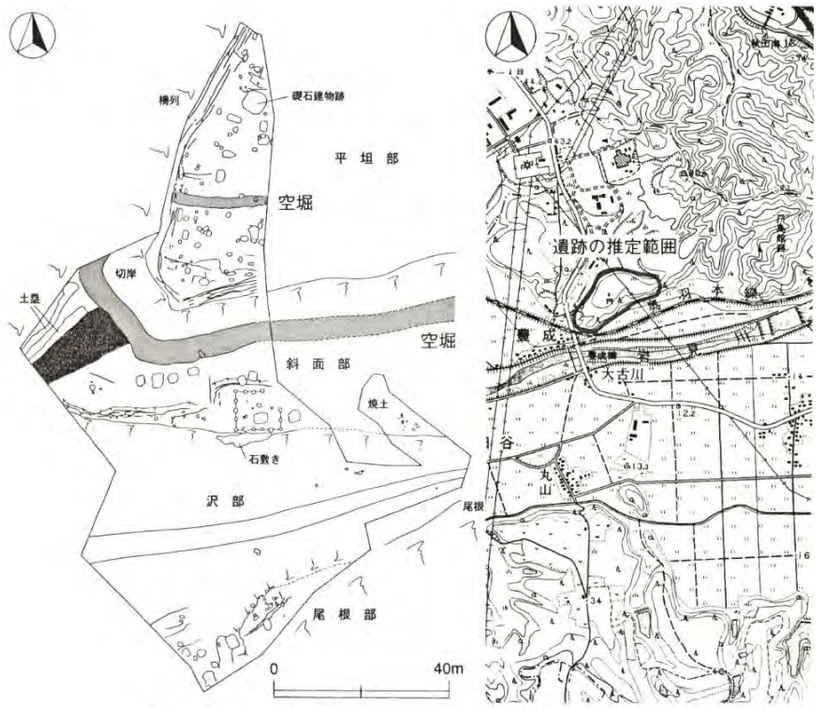
胆沢城　いさわじょう　岩手県奥州市

羽柴直人「資料　古代末・中世前期の東北の城館」（『兵たちの登場』高志書院　2010）

『日本紀略』延暦二十一（八〇二）年正月九日条に造営記事。出土漆紙文書に八〇二年から八〇四年のものがあり。9世紀初頭から10世紀後半＝Ⅲ期

三浦圭介「古代防御性集落と北日本古代史上の意義について」（『北の防禦性集落と激動の時代』同成社　2006

虚空蔵大台滝遺跡



立地と遺構配置略図

秋田県秋田市河辺豊成

遺跡は、台地頂部平坦面から斜面部、沢部、尾根部にかけて占地しており、頂部平坦面から沖積地までの比高は約35ｍである。調査の結果、頂部平坦面の縁辺部には柵列が巡ることが判明した。

柵列内には居住域（郭面）を二分させるような空堀が切られ、旧期では、斜面を削って平坦面を造成し、ここに４間×５間の掘立柱建物を配置している。この造成土内から東濃産（明和27号窯式）の灰釉陶器碗が出土した。

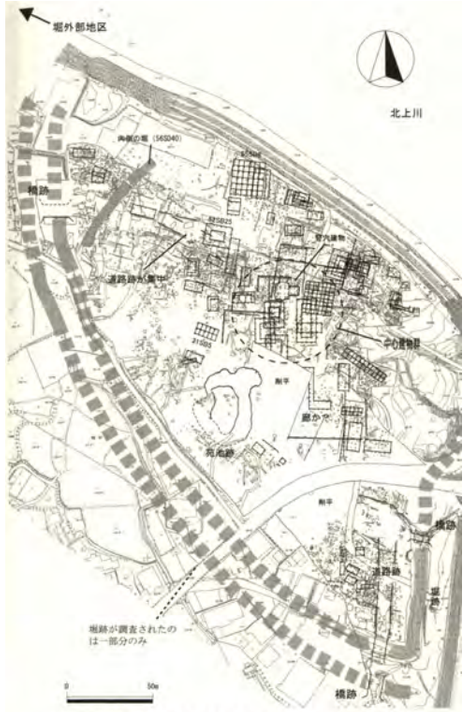
新期には、旧期遺構部と頂部平坦面の間に大がかりな空堀を造る。空堀は幅４ｍ、深さ約２ｍであり、平坦面から空堀底面までの比高は約10ｍに達する。また沢を挟んだ南側の尾根部には、溝を巡らせた掘立柱建物が造られる。溝内部から36個体のかわらけが出土した。その他に遺物には、土師器の把手付土器や小型手捏ね土器、銅製の仏塔出土している。

遺跡は、15世紀代にも墓域として使用されるが、空堀・柵列・建物などの構築時期は灰釉陶器やかわらけの年代観から11世紀後半から12世紀初頭と見られる。

三浦圭介・小口雅史・斉藤利男編『北の防御性集落と激動の時代』（同成社　二〇〇六）

＊堀幅、報告書では５～６ｍとする。

柳之御所



第１図　柳之御所遺跡（堀内部地区）主要遺構配置図

西澤正晴「柳之御所遺跡調査の現段階」（入間田宣夫編『平泉・衣川と京・福原』高志書院　二〇〇七）

岩手県西磐井郡平泉町

○奥州藤原氏三代の根拠地

○平安時代末期の堀に囲まれた大規模な遺構

○東半部を区画する堀は幅約10ｍ、深さ約２から５ｍの規模、一部二重

○堀の内外を結ぶ橋は二か所で確認

○大型建物・園池や井戸

○建物、塀には三時期ほどの変遷

○幅約７ｍの東西方向の道路

○出土遺物

かわらけ・白磁などの土器・陶磁器類、瓦、内耳鉄鍋・鏡・輪宝などの金属製品、食膳具・呪符・形代・建築部材などの木製品、硯などの石製品、動植物遺体

○八儀式がさかんに執り行われていた

○堀の内地区における中心的な空間

○中心的な年代は12世紀後半

○この遺跡が平泉において中心的な位置

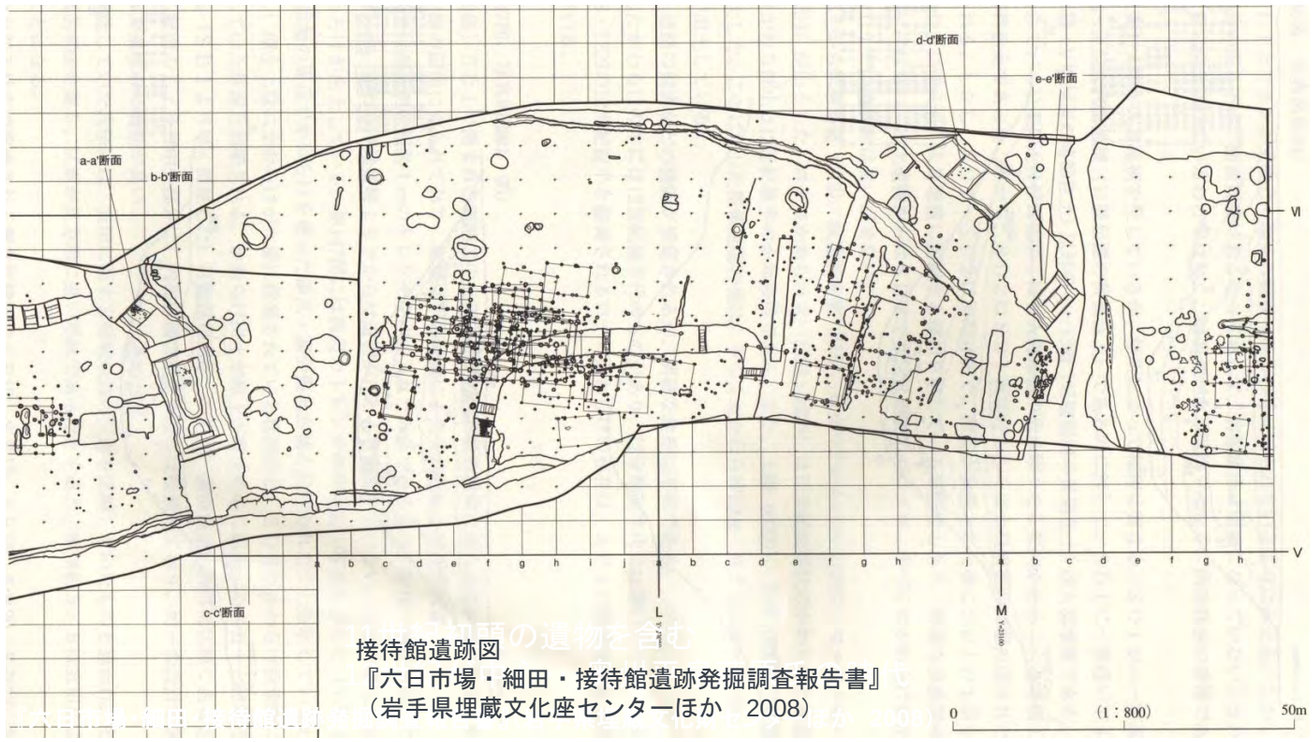
○柳之御所遺跡の堀の内地区が秀衡時代の政庁、「平泉館」に比定される可能性

○北上川を臨む台地上に立地し、大規模な堀で区画するという特異な構造の施設を中心

○遺跡の立地や構造にみる特異性は中世成立期の奥羽地方の特質を反映

○古代から中世の過渡的な段階における地方の支配拠点の具体的な様相

接待館遺跡



接待館遺跡図
『六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書』
（岩手県埋蔵文化座センターほか　2008）

岩手県奥州市

○柳之御所・平泉遺跡群のなかのひとつ

○堀幅：８～10ｍ

陣が峯城跡

福島県河沼郡会津坂下町

○12世紀に営まれた城館跡である。

○段丘崖である東辺をのぞく周囲は二重に堀を巡らす。

○堀の規模は南北辺が西辺より大きく、幅20ｍ、深さ15ｍほど

○比較的大型の建物

○出土品は中国・朝鮮半島産を含む陶磁器類、木製品、金属製

○陶磁器類では、中国産の白磁の四耳壺４個体のほか水注、碗・皿、青白磁、高麗青磁碗など奢侈品

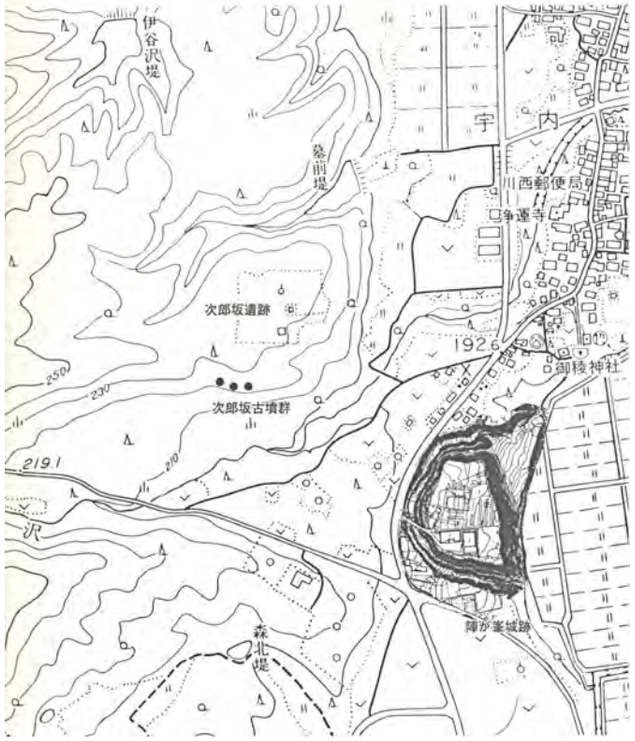
○炭化木製品や被熱した陶磁器が多く、火災に遭って廃

絶したことがうかがえる。

○柳之御所遺跡と共通し、会津地方における有力な政治的拠点である城館

○伝承どおり城氏に関係している可能性

○後世に再利用されることなく保存状況も極めて良好



会津坂下町文化財調査報告書第58集『陣が峯城跡』二〇〇五

阿津賀志山防塁

福島県伊達郡国見町

○平安時代末期の防塁跡

○堀幅：15m　堀総長：3.2km

（北日本の様相）

《11世紀》

・蝦夷の防御性集落：高屋敷館遺跡

・・・地形に沿った弓なりの堀

・清原氏の城館：虚空蔵大台滝遺跡・大鳥井山遺跡

・・・地形に沿った弓なりの堀

・安倍氏の城館：鳥海柵

・・・方形を意識した空間

《12世紀》

・奥州藤原氏の平泉・接待館遺跡

・・・地形に沿った弓なりの堀

・陣が峯城跡

二　関東の城館

鎌倉

【史料】『玉葉』　寿永二（一一八三）年十一月二日条

壬辰、天晴、伝聞、頼朝去月五日出鎌倉城、已京上宿旅館、及三ヶ夜、而頼盛卿行向議定、依糧料薪等不可叶、忽停止上洛帰入本城了、其替出立九郎御曹司誰人哉、可尋聞、已令上洛云々、或人云、今日義仲参院云々、

衣笠城

【史料】『吾妻鏡』治承四（一一八〇）年八月二十六日条

廿六日丙午、武蔵国畠山次郎重忠、且為報平氏重恩、且為雪由比浦会稽、欲襲三浦之輩、仍相具当国党党、可来会之由、触遣河越太郎重頼、是重頼於秩父家、雖為次男流、相継家督、依従彼党等、及此儀云云、江戸太郎重長同与之、今日卯剋、此事風聞于三浦之間、一族悉以引籠于当所衣笠城、各張陣、東木戸口大手、次郎義澄、十郎義連、西木戸、和田太郎義盛、金田大夫頼次、中陣、長江太郎義景、大多和三郎義久等也、及辰剋、河越太郎重頼、中山次郎重実、江戸太郎重長、金子、村山輩已下数千騎攻来、義澄等雖相戦、昨由比戦今両日合戦、力疲矢尽、臨半更捨城逃去、欲相具義明、義明云、吾為源家累代家人、幸逢于其貴種再興之秋也、盍喜之哉、所保已八旬有余也、計余算不幾、今投老命於武衛、欲募子孫之勲功、汝等急退去兮、可奉尋彼存亡、吾独残留于城郭、模多軍之勢、令見重頼云云、義澄以下涕泣雖失度、任命愁以離散訖、

（城の実態）

・鎌倉城・・・三方を山で正面を海？

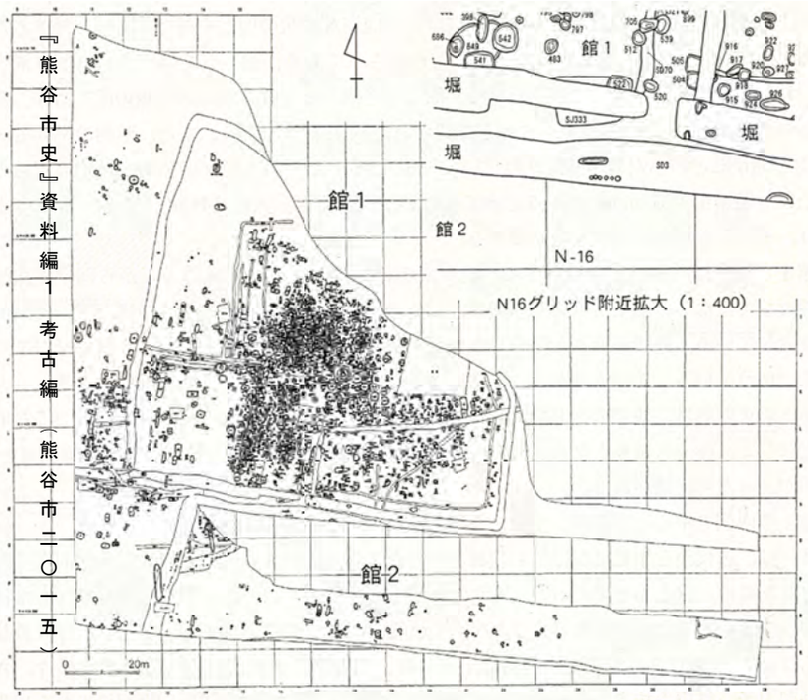
・衣笠城・・・戦国時代ともいわれる山城？

・通説の誤り

★　武家の屋敷・寺院・墓地などから構成される本拠地を呼んでいる。

飯島北遺跡

埼玉県熊谷市



第4図　発掘調査区全測図（中世）・部分拡大図

『熊谷市史』資料編1考古編（熊谷市二〇一五）

○12世紀後半から13世紀後半に至る方形館　14世紀には存続していない。平氏政権から鎌倉幕府期

○南北に併存する二つの館。北側は方形館。

○出土遺物：（国産）常滑甕・片口鉢、渥美甕、山茶碗系片口鉢、瓦質片口鉢、古瀬戸小型壺・広口壺、（舶載）龍泉窯青磁碗、同安窯系青磁碗、玉縁白磁碗、外反白磁碗

○堀幅：2.5ｍ（確認面）

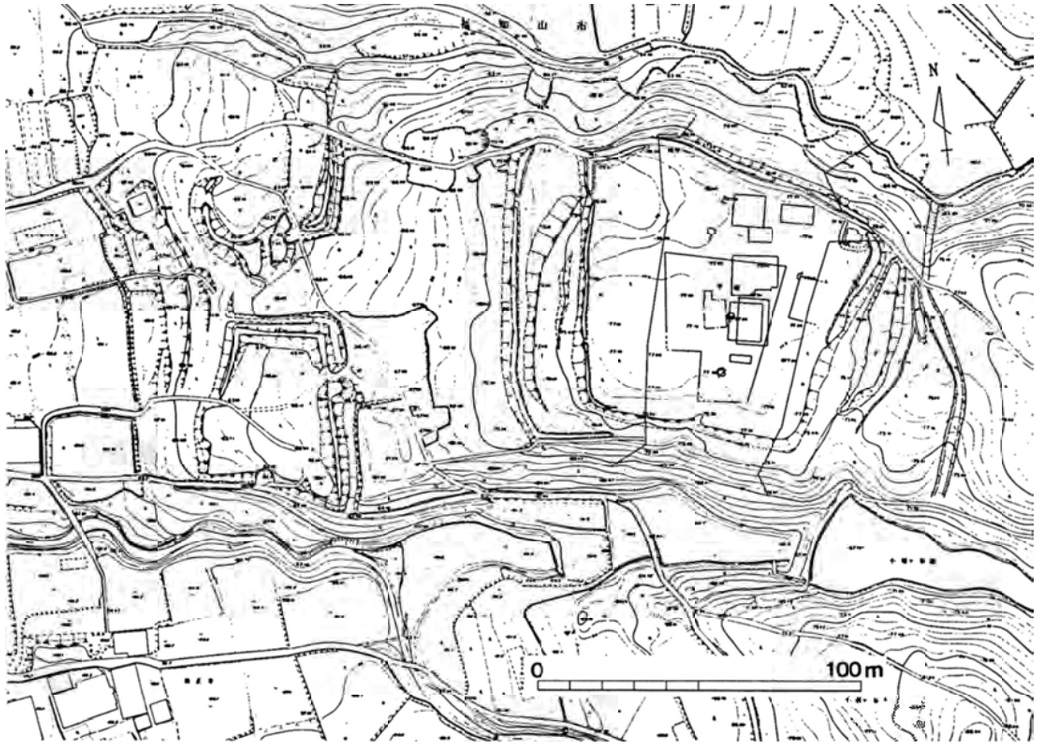
○長井斎藤氏関係の方形館か。

○問題は方形の堀がいつ成立したか。

三　畿内近国の城館

大内城

京都府福知山市大内平城



『京都府遺跡調査報告書　第３冊　大内城跡』京都府埋蔵文化財調査研究センター　一九八四

○標高約70ｍ（比高差20ｍ）の丘陵上に、南北100ｍ・東西400ｍの規模で存在した。そのなかで注目するのは丘陵上のおよそ100ｍ四方の方形単郭の城館である。この地で一九八一年に発掘調査がおこなわれた。その結果、全体で四期にわかれるものの、そのうちの第1期と第2期はおおよそ12世紀、そして3期は13～14世紀、四期は16世紀と分析された。遺跡の中心は12世紀にあたる1・2期にあった。

・報告書では六人部庄が平家没官領であった。この点と城の廃絶を考え合わせれば、城の主は平家ゆかりの人物であったことが浮かび上がる。

六波羅城

京都市

○堀幅：約３ｍ

【史料】『平治物語』中巻「六波羅合戦の事」（岸谷誠一校訂『平治物語』岩波書店　一九三四）

悪源太のたまひけるは、今日六波羅へよせて、門の中へいらざるこそ口をしけれ、すゝめや者どもとて、屈竟の兵五十余騎、鏑をいかたぶけてかけいれば、平家の侍ふせぎかね、はと引てぞ入にける、義平まづ本意をとべぬとよろこんで、をめきさけんで懸入給へり、

（中略）

源平互いに入りみだれて、こゝを最後ともきあうたり、孫子が秘せし所、子房が伝所、互にしれる道なれば、平家の大勢、陽にひらいてかこまんとすれ共かこまれず、陰にとぢてうたんとすれどもうたれず、千変万化して、義平三方をまくりたて、面もふらず切てまはり給ひしか共、源氏は今朝よりの疲武者、息をもつがずせめ戦、平家はあらてを入かへ入かへ、城にかゝて馬をやすめ、懸いで々々々たゝかひければ、源氏つひにうちまけて、門より外へ引しりぞき、やがて河をかけわたし、河原を西へぞ引たりける、

楠・荒田町遺跡（福原京）

兵庫県神戸市中央区楠木町

○ SD01は北東部分では調査区外になり、南側の肩のみが検出されている。規模は場所によって多少異なり、最大幅約3.0m、最小幅約2.1m、平均して上幅約2.7m、深さは浅い地点で約1.1mになるが、最大では約1.7mの規模を持ち、断面形がV字形を呈した薬研壕。

○ SD02は最大上幅約2.1m、最も狭い位置で1.6m、平均

すると約 1.8m の幅を持ち、下幅は約 1m である。深さは浅い部分で 1.2m、深い部分で約 1.8m、平均すると約 1.6m を測る。断面形が U 字形を呈した箱壕である。

○北側の薬研壕状の SD01 からは土師器皿や瓦器が廃棄された状態で数多く出土しているのに対して、南側の箱壕状の SD02 からの出土遺物は少なく、一括して廃棄された状況は見られなかった。出土遺物から SD02 が先に掘削され、その後 SD01 が平行して掘削されたものと思われ、

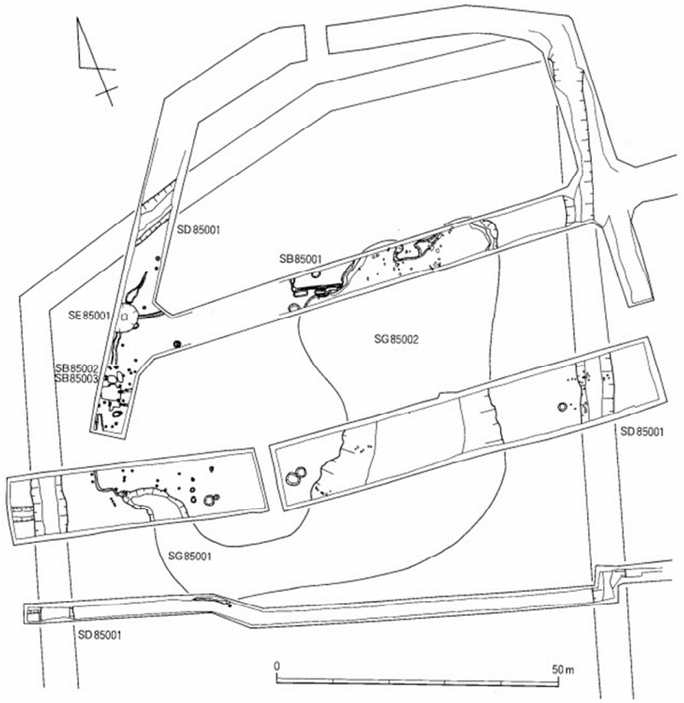
○大規模な溝として一定の防御機能は持っていたが、後の城郭や武士の館などの堀に比すると小さく、貧弱である。また、同時期の奥州平泉の館を囲む堀と比べても非常に小さい。（羽柴 2000）戦乱に備えて立て籠もることを考えて掘られたものではなかろう。

○一定時期両壕が並存していたことは完全には比定できないまでも、両者は違う意図で掘削されたらしい。

「楠・荒田町遺跡Ⅱ　神戸大学医学部附属病院埋蔵文化財発掘調査報告2」（兵庫県教育委員会　二〇〇八）

玉津田中遺跡

兵庫県神戸市西区玉津町田中



○方1町以上の規模をもち、深い堀をめぐらし、広大な池や瓦葺建物を配するような居館は、都や平泉・鎌倉といった大都市以外では、あまり例のないものである。その占地にあたってわざわざ条里制地割をずらしている点からも、この居館の主が明石川流域で並々ならぬ力を有していることが知られる。これだけの居館が文書にも伝承にも残っていないのは、存続期間が短かったことに加えて、主が寺社領の関係者ではなく、国司に連なる人間であったためとの見方も可能である。

○瓦：京都市の法住寺殿に同文品。

○堀幅：約５ｍ。

「玉津田中遺跡 - 第４分冊 -（辻ヶ内・居住地区の調査）」兵庫県教育委員会　一九九五）

おわりに

（拠点・要害施設の様相）

遺跡名	堀幅
（北日本）	
大鳥井山遺跡	外側 9.2m・ 内側3.8m
鳥海柵	8.15m（伝二の丸東南部調査区 東部T）
虚空蔵大台滝遺跡	5～6m （斜面）
柳之御所	10m
接待舘遺跡	8～10m
陣が峯城跡	二重堀（幅は合わせて20メートル）
阿津賀志山防塁	二重堀（幅は合わせて15メートル）
（関東）	
鎌倉	―
衣笠城	―
飯塚北遺跡	2.5m（確認面）
（畿内近国）	
大内城	なし
六波羅政庁跡	約3m
楠・荒田町遺跡	SD01 3.0m ・ SD02 2.1m
玉津田中遺跡	約5m

★十一・十二世紀の列島には、

城館に地域性が見られる

・北日本　・・・古代以来の戦乱の蓄積

律令政府の派遣・高地性集落

・関東　・・・要害施設の未確認

屋敷空間を書籍が「城」と呼称

・畿内近国・・・区画性の溝

平氏政権との関わり：日宋貿易による大陸知識の吸収

都市設計（都城制）

飯塚北遺跡の背景